

明日こそ

ジンジャーティー

清水らくは

平日の午前中。そこは私の安らぎの時間、だった。

お客さんがいないのだ。人通りも少ない場所だし、元々夜しかやってないお店だったから。私が無理を言って、お昼にカフェを出来るようにしてもらったのだ。午後三時を過ぎると、人が来ることもある。常連さんはいなくて、迷い込んだように立ち寄る人たち。そんな感じ、だった。

人がいないときには、ひたすら紅茶の研究をしている。おいしい淹れ方、新しいブレンド、美しい見せ方。私は誰よりも、紅茶が好きだ。だから誰も飲んでくれなくても、自分で飲み続けていれば幸せだった。

ふらふらしていた私が名目上仕事を持っただけでも、父は嬉しそうだった。だから、私も安心だ。今のところ大赤字だけど、そのうちおいしい紅茶の噂が広まって、お客さんも増えるだろう。事実、ついに常連さんができたのだ！

その人はいつも十時過ぎにやってくる。歩いてくるので近所の人だろう。見た感じ二十代後半、髪は少し長め、縁のない眼鏡をかけている。白系統のシャツを着ていることが多いが、ごくたまにスーツを着ていることもある。おしゃれには気を使っていなさそうだが、腕時計はどう見ても安物ではない。

彼は無言のまま、一番奥の席に着く。鞆からノートパソコンを取り出し、起動させ、一分ぐらいしてからおもむろに「ホットコーヒーを」と言う。そう、この私にコーヒーを頼むのです！

店の外の看板にも店内にも、「紅茶をどうぞ」と書いてあるし、メニューにも紅茶がいっぱい載っていて、申し訳程度にたった一行「ホットコーヒー」と書いてあるだけなのに。父が「喫茶店ならコーヒーだろう」と言ったのでいやいやメニューに付けくわえただけなのに。彼はさも当然というように、毎日まずいコーヒーを飲むのだ。しかもパソコンにくぎ付けになった彼は、コーヒーになかなか口を付けない。飲み終わってしまったら座る権利を失ってしまうとでも思っているのか。

唯一の常連。それだけのはずなのだが、妙に気になる。妙だから気になるのだ。パソコンで何をしているのか。どこに住んでいるのか。そもそも仕事は何をしているのか。全てがよくわからない。

外は雨。店の中には私と彼だけ。冷めたコーヒーと、私の前にはアップルティー。

「はい、はい……ちょっと待ってくださいね」

彼は、携帯電話で誰かと話している。少しガラガラ声で、ゆっくりと喋る。

「あ、そこはですね……はい、銀捨てて……はい、金から、はい……それで……」

パソコンを見ながら金だの銀だのと言っている。ひょっとしたら、何かの相場について相談しているのだろうか。毎日仕事していないように見えて、ここで取引とかをしていたのかもしれない。

「はい、はい。桂馬を打ったら角を2三から打って」

<ケーマ>を売るというのは意味がわからないが、鉾物か何かだろう。しかし兄さんからの<核>というのは何かの隠語だろうか。そのままだとしたら話が壮大すぎる。

その後もよくわからない話を、時には眉をひそめながら、時には笑いながら話している。とてもやばい仕事をしている顔には見えないし、ひょっとしたら趣味程度の話なのかもしれない。

電話が終わったのか、再びパソコンに目を落とす彼。そのまなざしは真剣で、すこし、かっこ

いいかも、と思った。

「あの……」

「あ、はい」

「コーヒーをもう一杯」

夜七時、父にバトンタッチされたカフェは、おしゃれさを増す。悔しいが父はお酒も料理も作るのがうまく、多くの人が快適な空間を求めてやってくる。

私も、できるだけ手伝うことになっている。今のところ昼間は赤字だから仕方がない。ま、看板娘はいるだけでも価値があるのである。

毎晩のように来るのは、ギターを持った三人組のおじさんたち。地元では有名な金持ちグループだ。何の仕事をしているか知らないが夕方から暇になり、いつもギターの練習をする。そしてそのあと飲みに来るのだ。

「そういえばさ、近所でプロ棋士見たぜ」

おじさんの一人、アゴヒゲ山本。プロキシというのは聞いたことがあるが、ネット上のものでそこら辺に転がってはいないと思う。酔っ払っているのだろう。

「へー。誰」

「名前は忘れた。あんまり有名じゃないんだよな。ただ、去年一回テレビ出てた」

話の内容はさっぱりわからない。まあしかし気前よく飲んで食べて、たまにかっこいい演奏を聴かせてくれる、いいお客さんたちだ。

「マスターは見たことないの」

「うーん、よくわかんないなあ」

父は薄くなってきた頭をかきながら、首をかしげる。この人はいわゆる聞き上手だ。どんなにいい加減な話でも、否定したり無視したりしない。私にとっても理想的な父親だが、母にとって理想的な夫ではなかったらしい。

「それさ、池永五段じゃない」

そう言ったのは伊達眼鏡斉藤。口数が少なく、モスコミュールばかり注文する。

「池永？ そう言えばそんなんだったかな」

「昔あった、駅前の時計屋の息子」

「時計屋？ ああそう言えば池永さんだったか」

「そう言えば、将棋好きだったなあ」

最後の言葉は、ロレックス進藤。高級時計にとりつかれた男だ。ところでショーギスキとはまた何のことだろう。

とりあえずわかったのは駅前にあった時計屋さんの息子（池永）がネットに関係する何かの仕事をしていて、テレビ出演もしたことがあるショーギスキであるということだ。よくわからん。

「笹子ちゃんを見たことないの」

「うーん、ちょっとわかりませんねえ」

何となく興味は湧いてきた。

雨がしとしとと降っている。喫茶店日和ではないか。

店内BGMを考えるのも好きだ。うちには有線など入っておらず、CDかレコードを選ぶことになる。父は古いレコードなどをニヤニヤしながら眺めているタイプだけど、幸いそれは私には遺伝しなかった。ロックかジャズ、R&Bも少々。クラシックは苦手だ。

雨の日にはしっとり、というのも好きではない。せっかく室内にいるのだから、からっといききたいものでしょう。

そんなわけでギターとドラムの冴えたバンドの曲を、いつもより大きめの音量で。イメージはオレンジティーだ。

からからとーん。扉の開く音がした。いつもは誰も来ない時間なのでちょっとびっくり、そしてわくわくしたが、入ってきたのはいつもの彼だった。いつもとは違い青いカッターシャツで、右肩が濡れていた。

「ここだよ」

傘をたたみながら、彼は振り向いた。そして、現れる赤い靴。浅めのハイヒールだ。危ないので私ならこんな日には履かない。

「……うん」

彼よりも頭一つ背が低い。長く柔らかそうな髪の間隙から見える肌のつやに、どきりとした。ちょっと尖った顎と、すっと通った鼻すじ。眼は少しつり気味で、睫毛が短い。

彼はいつも自分が座る席へと、いつもよりゆっくりと歩いていった。彼女はその後をついていく。うつむきながら。

いつもの席の向かいに、初めての人が座る。私の心臓は色々な意味でドキドキしっぱなしだ。

「どうする？ ここ、コーヒーがおいしいよ」

メニューを見せながら、とんでもないことを言う彼。あれをおいしいと思っていたとは、自分の作ったものながらあきれれる。

「……私、これで」

「あ、うん。……あの、ホットコーヒーとレモンティーを」

思わず声を出さず、彼の口元を見つめてしまった。数秒後、はっと我に帰る。

「は、はい。かしこまりました」

レモンティー。心の中で繰り返す。レモンティー。初めて女性からの紅茶の注文。

いつも以上に適当にコーヒーを準備し、魂をレモンティー作りへと注ぐ。何度も繰り返してきた作業だが、極限まで集中力を高める。

茶葉を通して色を付け、香りをまとい、紅茶は世界に産み落とされる。私はその瞬間、たまらなく幸福を感じる。

「できた」

思わず小さくつぶやいてしまった。

慎重に、慎重に席まで運び、テーブルに置く。

「レモンティーと……ホットコーヒーになります」

彼は小さくうなずいたが、彼女は相変わらずうつむいていた。それでも紅茶を出せたことで、私の足取りは軽くなっていた。

「私……」

でも、背中を向けた瞬間聞こえてきたのは、どうしても気になってしまうような冷え切った声だった。なんとか平静を装ったまま、自分の場所へと帰ろうとする。

「池永さん、私、将棋を続けていく自信がありません……」

池永、将棋、二つの言葉が、先日のギターメンズの言葉を思い出す。どうやら彼が時計屋の息子の池永さんで、ゴダンでプロキシでショーギスキなのだ。

「どうしたの。あんなにやる気だったのに」

「私……もうすぐ二十二歳になります」

二人の会話にくぎ付けになってしまう。私は食器を洗うふりをしながら、聴覚に力を入れる。

「そっか。早いね」

「友達は就職決まったり、結婚する子もいて……不安なんです」

「不安？」

「このまま大学出て……棋士になれなかったら……」

どうやら進路相談のようだ。私にも同じ経験があるから、気持ちはわかる。あと、キシになりたいらしい。ひょっとしてプロキシというのはプロのキシということだろうか。

「それであきらめるようなことなの？」

「え」

「いや……なんていうかさ、あきらめられることなら、あきらめた方がいいよ。棋士になって、常に悩む事ばかりだよ。どうしてもなりたくないじゃなきゃ、無理に続けなっていう理由はないかな」

「……」

見かけはふわふわした感じなのに、彼の言葉はとても厳しかった。彼女の方はうつむいてしまい、次の言葉が出てこない。

「江草さんは頑張ればプロになれると思うよ。でも、その後のことは分からない。結局は将棋が好きかどうか、じゃないかな」

紅茶もコーヒーも、冷めていくばかりだった。なんとなくわかった。池永さんは将棋を仕事にしている、江草さんは仕事にしようとしている。しかしなりたいたからなれる、というようなものではないのだろう。少なくとも求人誌に将棋をするお仕事が載ってるのは見たことがない。

今まで名前も知らなかった人の、色々な面を一度に覗きこんでしまった。どうやら私は、どうせならもっと知りたい、と思い始めている。

初めて二人以上のお客様。そんなことも、帰ってしばらくしてから気が付いた。私が気になっているのは、初めて残されたコーヒーカップの中身。

二人は次第に口数が少なくなっていき、特に結論が出ないままに店を出ていった。しばらく空気は重たく、湿ったままだった。残された私は、それを持って余していた。

彼らを苦しめる、将棋とは何なのだろう。私が知っているのは、色々な駒があって、それを動かすゲーム、というぐらいのことだ。将棋のせいで苦しんだり、悩んだりしている姿は見たことがなかった。

夕方になり、父が下りてきた。

「ちょっと、出かけてくるね」

「あ？ ああ」

店を出て、傘を差す。雨はとても激しいが、気にならなかった。靴も平べったいし。

一番近くのコンビニに入り、いつもは立ち止まらない棚の前に立った。文房具などの横に、トランプや花札があり、そしてマグネットの将棋セットがあった。うろ覚えだったが、記憶に間違いはなかった。ずっと前に、「こんなもん買う人いないだろう」と思ったのを思い出したのだ。

それを今、私が買う。

「780円になります」

会計を済ますなり、急いで店を後にして、冷たさに気付いて傘を取りに戻った。何がそんなに私を動かすのか、よくわからない。けれども、一刻も早く「知りたい」と思った。

「ただいま！ ちょっと一時間待って！」

「用事あるなら別にいいぞ」

いつにない私の勢いに父も啞然としているようだった。しかし、そんなこともほとんど気にしていられない。

箱から出したマグネット盤を、机の上に広げる。駒は板から型抜きするようになっていて、次々にプチプチと押し出さなければならなかった。

ようやく全ての駒を分離させて、説明書に目を落とす。まずは駒の読み方と動かし方が書いてあった。矢印があちこちに飛んでいて、全くわけがわからない。

「何これ……」

とりあえず、これは簡単なものではないぞと思ったが、小学生にもできるのだから、と思い気を取り直す。駒を動かすのは交互で、前の駒を飛び越しては動けない。ただし桂（カツラではなくケイマらしい）は前の駒を一つだけ飛び越して、左右一つ隣に着地するというトリッキーな駒のようだ。相手の駒と重なったところに着地すると、その駒はもらうことができる。そしてその駒は、自分の好きな時に1ターンを消費して駒の無いマスに置くことができるようだ。

最終的には、相手の王将（これはなんとなく読み方を知っていた）を取れば勝ちのようだ。味方の駒はどんどん犠牲にして、リーダーさえ捕縛すれば勝利という結構ドライなゲームらしい。

何度も駒を動かして、動かし方を覚えた頃には深夜になっていた。ふと、あの二人も今将棋の勉強をしているのだろうかと思った。いやさすがにもう寝ているか。女の子は今も泣いているかもしれない。ただ何となく……池永さんは、常に将棋のことを考えながら生きているんじゃないか、そんな気がしていた。

池永さんは、来なかった。

今までも来ない日はあった。今にして思えば、それは将棋の仕事がある日だったのだろう。

結局、一人もお客さんが来ないという不名誉なことになってしまった。父は特に何も言わないけど、さすがにこのままではまずい。

焦りから無駄な動きが多くなる。まだ六時半、まだお客さんもおらず、たいしてすることも無い。それでも洗い物がないかと覗いたり、注文を取りに行かなくていいかと機会をうかがったり。いつもより心がざわついているのがわかる。

ドアが開く。父が「あっ」と言った。私は、声を出す事も出来なかった。

入ってきたのは、池永さんだった。今日はスーツだったが、皺だらけになっていた。そしてそれ以上に、表情は疲れ切っていた。

彼はよろよろとカウンター席まで来ると、父の目の前に腰掛けた。そして、小さな声で言った。

「夜は、お酒飲めるんですね」

「ああ、まあね」

父もいつになく困惑している様子だった。若いお客さん自体少ないうえに、こんなに様子がおかしい人はこのお店では見かけない。

「その……ブラックルシアンってありますか」

「あるけど、お薦めはしないな」

ブラックルシアンは確か、ウォッカベースのかなり強いお酒だ。私なんかはにおいだけでふらふらしてしまうやつだ。

「……お願いします。あの、俺……」

「メニューにはないけど、ホワイトルシアンを作ってあげよう」

池永さんは、虚ろな目で父がカクテルを作る姿を見つめている。ウォッカにカルーアを入れた、ブラックルシアン。そこに生クリームを入れたのがホワイトルシアン。飲んだことはないけれど、ブラックよりホワイトの方が随分飲みやすいと思う。

「はい、どうぞ。君、プロ棋士でしょ。黒より白の方が縁起いいよ」

「……」

目の前におかれたカクテルに視線を落とし、しばらく池永さんは固まっていた。重なっていた氷が溶けてき、カチン、と音を立てた。

「……嫉妬なんです」

「は？」

「小学生の時からライバルが……タイトル挑戦を決めて。悔しくてたまらないけど、おめでとうって……。昨日後輩に偉そうに言ったのに、俺自身はどこかで諦めていたり、なんて言うか……」

言葉に詰まった池永さんは、一気にグラスの半分ほど飲みほした。よろしくない飲み方だった



。一瞬目を見開いて、その後頭を抱えてしまった。

「すみません……いきなり来てこんな……」

「いいよ。そういうのは、若者の特権。一日ぐらいぐだぐだしたらいい」

「……ありがとうございます」

その後は、時折ちびちび飲んで、首を振って、ため息をついて、目頭を押さえて。とても幼く見えた。そして、何とかしてあげたいと思った。

私にできることは、少なかった。そして、今しないと色々後悔すると思った。

「これ……どうぞ」

突然出されたティーポットに、池永さんはとろんとしていた目をきょとんとさせた。私は気付かないふりをした。

「マスカットティーです。香りがとてもさわやかで、気分がすっとするんです。私からのサービスです」

「……ありがとう」

池永さんはおぼつかない手つきで紅茶を注ぎ、顔を近づけて香りを嗅いだ。そして、一瞬目をきりっとさせた。

「どうですか」

「確かに、爽やかだ」

そのあと彼は、一杯目を一気に飲み干した。嬉しい飲み方ではないけど、飲んでもらえたことが嬉しかった。

「温まって、落ち着いて、紅茶ってちょっとした魔法なんですよ」

「魔法……」

我ながら恥ずかしいことを言ったと思ったが、池永さんは真面目に受け取ってくれたようだ。隣で父は含み笑いをしているが。

そのあと二杯目はゆっくりと飲み、少し残った三杯目を更にゆっくりと飲んで、池永さんは立ち上がった。

「ご迷惑おかけしました」

「いや、全然。いつでも飲みに来てよ」

「ありがとうございます」

会計を済ませた後、池永さんは思い出したように振り返った。私の顔を見ている。

「紅茶もおいしかった」

ふらふらとした足取りで、店を出ていく彼。そして、私の脇をつつく父。

「なに」

「粋なことするなあ」

「お客さんに対する先行投資です」

「つーか、彼、紅茶飲んだことなかったのか」

「いつもコーヒー」

「あの不味いのを？」

そう、あの不味いのを。彼は本当に、あれのことを美味しいと思っているのだ。

そういえば、池永さんに次に会った時、言おうと思っていたことを言えなかった。「今度、将棋を教えてください」とてもそんなことを聞ける雰囲気ではなかった。そして一つ、後悔もしていた。

こういう時は、ジンジャーティーの方がよかったな。

重い腰を上げた決意は、早くも崩れ落ちてしまいそうだった。

先日アゴヒゲ山本が「将棋の大会、プロの先生が来るらしい」と言っていたので詳しく聞くと、初心者コースは無料だというのだ。これまで一人で唸りながら勉強していた私にとって、またとない実戦のチャンスである。

そんなわけで快晴の日曜日、どんな太陽の下でもなく、大会が行われるという会館にやってきた。会場は三階。気合を入れて階段を駆け上がってきた。

入口の前には長机が並んでいて、おばさんが二人座っていた。

「こちらで受付をお済ましてください」

「あ、あの……初心者コースで」

「はい。初心者コースは無料になります。こちらにお名前と住所をお願いできますか」

「は、はい」

記帳を済ませ、恐る恐る会場に足を踏み入れよう……とした。が、目に飛び込んできたその風景に、体が硬直してしまった。

おじさんおじさんおじさんおじさん少年おじさんおじいさんおじさん青年おじさんおじさん…

ぐるっと見まわした結果、女性は三人しかいなかった。女の子が一人、おばさんが一人、そして同年代ぐらいの、ポニーテールの方が一人。今すぐその人のところに駆け寄りたい気もしたが、そのためにはおじさんの海を泳いでいかねばならない。

別におじさんが嫌いだとかそういうわけではない。将棋は男性が多いだろうことも予測していた。しかしこれほどまでに世代がばらけていないとは！ この中に入れば、若い女性は目立ってしまうに決まっている。

なんとなくだが、店に来ていた二人の延長線上で考えていたことに気付かされる。若い二人の姿を見て、若者が人生をかけるものに対して興味がわいたのだ。それがまさかこんな状態とは…

…

「はじめまして」

「え、あ、はじめまして」

気がつくと、ポニーテールさんが目の前まで来ていた。肌が白くて、鼻先が通っていて、上品な美人だ。

「驚きました？」

「そう……ですね」

「私も最初はびっくりしたんです。大きな居酒屋かと思いました」

「ははは」

「でも、気にしなくていいですよ。将棋、楽しいですから」

この人がいてよかった。本当によかった。

「あ、これ」

「あ、はい」

彼女は、名刺をくれた。そんなこと想定していなかったのも、私は名刺を持っておらず、ひたすら頭を下げるしかない。

「……あ」

薄いオレンジ地の名刺。そこには、所属している事務所だとか何とかのことが書きこまれていたが、私が目をひかれたのはただ一点、名前だった。江草明乃。

「どうしました？」

「ひょっとして……お姉さん？」

「あら、妹を知っているんですか？ 今、研修会なんです」

世間は狭い。狭すぎる。

「じゃあ、ストロベリーティーで」

「はい」

初めて、こちらから何も言わないうちに紅茶を頼んでもらえた。しかも、ストロベリーティーは私もお気に入りである。

大会の後意気投合し、明乃さんはお店まで来てくれた。メニューを見るなり注文。しびれる。

「いいお店ですね。落ち着く」

「ありがとう」

明乃さんは美人なだけでなく感じもよく、非常に優しく、そして楽しい人だった。妹のこと、将棋のこと、いろいろと教えてくれた。

明乃さんの妹は、江草美沙さん。中学生から将棋をはじめ、女性のプロになるため、研修会というところに所属しているらしい。ここで一定の成績をとれないと、プロになれない。

妹が頑張っている姿に触発されて、明乃さんも将棋を始めたという。妹には悔しくて聞けないので、雰囲気の良い教室や道場(そんなものあるんだ！ と思った)を探し回っているとか。

「まさか美沙がここに来ていたなんて、びっくりです」

「レモンティーを頼んだの。私にとって、初めての女性からの紅茶の注文」

「あれ、でも池永先生がよく来てるって言ってませんでしたっけ」

「あの人はまずいコーヒーが好きみたい」

「ああ……わかる」

ゆったりとした時間が、幸福に流れていくのがわかる。明乃さんは、私が望んでいた空間をこの店の中に作ってくれる。そういうものをまとった人なんだと思う。

「美沙は昔から池永さんにお世話になってるんです。池永さんがプロになったから、自分も早くそうなりたいって。でも、やっぱり厳しいですよ」

「やっぱりプロも……男だらけなんですか？」

「うーん、そうといえばそうだし。ただ、女性だけのプロがあって、美沙はそこを目指してるんです」

「へー、スポーツみたい」

将棋は、頭でするものなので男女差がない、ような気がする。けれども、実際に会場にいたのは男の人ばかりで、当然優勝するのも男性だ。あの中では、最初の一步さえもひるんでしまう。そ

うすると女性は参加することもなくて、結局男社会で、居酒屋なのだ。

「本人の大きな目標だから、プロになればいいんですけど……」

あの日の彼女の顔を思い出す。それは……厳しい世界に似合うとは思えなかった。「結局は将棋が好きか」池永さんはそう言った。でもきっと、それ以外の困難はたくさんあると思う。とはいえ、具体的には、どんなことかはわからない。

「将棋のこと、もっと知りたくなってきちゃった」

「面白いですよ、いろいろと」

並べられたテーブルには、二つの将棋盤が並べられていた。一つの盤では、初めて見る男性が二人、直方体の時計をたたきながら対局している。なんでも「ショーレーカイン」という怪しい立場の人たちらしい。何度聞いても日本語に聞こえない。そしてもう一人、まだ駒も並べられていない盤の前に座る女性。前回よりは落ち着いた感じだか、どこか物憂げな様子の江草美沙さん。彼女もまた「ケンシューカイン」というものらしい。将棋の世界には謎が多い。

そしてカウンター席には明乃さん。彼女は正真正銘ふつうのお姉さんである。

「来ないなー」

腕時計に何度も目をやる明乃さん。集合は十時とのことだったけれど、今は十時三十分。

「なんかあったのかな」

「うーん、遅刻とかしない人なんですけど……」

明乃さんは大きなため息をついた。つられて私からも息が漏れる。

私と明乃さん以外の四人は普段から「研究会」というものをやっているらしく、日時を決めては将棋三昧の時間を過ごすらしい。いつもは誰かの家に集まってやるが、「たまにはいい雰囲気のところでは？」という明乃さんの提案によりここですることになったのだ。

ただ、不安は少しだけあった。彼はあの日以来、店に来なくなっていたのだ。酔って醜態を見せたと思ったのかもしれないし、単に生活パターンを変えたのかもしれない。まあ、いつも行っていた店に久々に行くことの後ろめたさは、私にもわかる。

「せっかくなので指してもらったらどうですか」

「……え？」

「美沙も退屈でしょ」

「え、その……まあ……」

「よし、決まり」

明乃さんは私を促して、無理やり美沙さんの前に座らせてしまった。美沙さんは上目づかいで「指します？」と聞いてくる。断るのも変な気がして、私も上目づかいで「お願いします」と言った。

美沙さんが駒箱を開け、盤に駒を広げる。そして少し頭を下げてから、王将を取り上げ、自陣に置いた。私は目についた飛車を持ち上げ、「飛車は左、飛車は左……」とつぶやきながら飛車を置く。いまだに飛車と角の位置を逆にしてしまうことがよくあるのだ。

駒を並べ終わると、再び上目づかい。

「どうします？」

「え？」

「落としましょうか」

「え？ え？」

私が何のことかわからずおろおろしていると、美沙さんは明乃さんに視線をやった。明乃さんが小さくうなづく。

「じゃあ、二枚落ちで」

なぜか明乃さんはせっかく並べた飛車と角を駒箱にしまってしまった。訳が分からない。

「では、お願いします」

「は、はい、お願いします」

まだ先後も決めていないのに……と思ったが、美沙さんはためらわずに初手を指した。なんだろう、上位者が先に指すという暗黙の了解があるのだろうか。抗っても仕方ないので私も続けて指す。相手は駒が少ないのだから、後手になったところでこちらが圧倒的有利だろう。

有利なはずだ。

はずだったのに……

気が付くと私の玉将は追い詰められていた。気持ちよく攻めていたので、相手の持ち駒のことなんて見ていなかったのだ。一生懸命考えるが受けがない。

「負けました……」

「ありがとうございました」

その声は凜としていた。いつの間にか、美沙さんの顔はとてもきりっとしていた。

「やはり、玉を囲うことが大事ですね」

「はあ」

「ちょっと振り返ってみましょうか」

美沙さんが駒を再び並べ始めた、その時だった。ドアの開く音。

「遅れてすみません」

池永さんだった。

「あ、じゃあここに」

私は席を立ち、池永さんに着席を促した。そして職務に戻る。

「すみません。寝坊してしまって……」

本当に申し訳なさそうに、そして少しは気まずそうに頭を下げる池永さん。席に座る直前、美沙さんと視線がぶつかった。ほんの、数瞬。けれども、不自然な停止時間。今まで見たことのない、襟のピシッとした服。無精ひげも全く見られないし、髪型もかなり決まっているし、爪まできれいに切られている。寝坊なんかしてないでしょう。

「何か飲みますか」

私は池永さんにメニューを差し出す。何気なく受け取ってから、目を丸くする。そして、私のことを見上げる。

「えーと」

「どちらが良いですか」

池永さんはメニューに視線を戻し、しばらく唸っていた。それもそのはず、今日のために特別に用意したメニューなのだ。そこには、コーヒーとジンジャーティーしか書かれていない。ここまですれば私の意図は伝わるだろうと思ったが、彼はそれでも「コ」と発音するために口を開いた。私は思わず睨みつけた。

「……カッ……ジンジャーティーで」

何とか口の形を修正して、ようやくこのかたくなな男は私に紅茶を頼むに至った。

数分後、テーブルに運ばれるジンジャーティー。ちなみにその間、会話はなかった。

「まだ熱いですから気を付けてくださいね」

「あ、はい」

怪しげなものに恐る恐る見る目で、池永さんはティーポットを見ている。ひょっとして……注ぎ方を知らない？ 声をかけようかと思ったその時、美沙さんがポットを手にして、さっとカップに紅茶を注いで池永さんに差し出した。

「いい香りしますよ」

「ありがとう」

池永さんはカップを持ち上げ、鼻を近づけた。

「あっ」

「どうですか」

「不思議な香りですね」

口を付けて、ジンジャーティーをついに飲む彼。そして、こう言った。

「紅茶もおいしいですね」

思わず私はガッツポーズをしそうになった。それを抑えて、にっこりとほほ笑む。

「あの……」

そして、美沙さんが口を開いた。ただならぬ空気が流れて、ショウレイカイーンたちも将棋を中断して彼女に注目した。

「どうしたの？」

聞きはするものの、池永さんも何か覚悟したような顔をしている。明乃さんも、小さく頷きながら妹のことを見守っている。

「私……研修会やめます」

「そっか」

おそらく、ずっと前から結論は出ていたのだろう。本人が言い出すのを、周囲はずっと待っていたのだ。

「将棋は好きだけど……他のこと、頑張ります」

「師匠には」

「まだ……今度言います」

「うん。全部、江草さんが決めることだからね。やりたいことはあるの」

「まだ……正直、やめること以外考える余裕がなくて」

「そっか。……じゃあさ、結婚する？」

思わず持っていたレモンを落としてしまった。ショウレイカイーン二人もあっけにとられている。明乃さんは大きくうなずいていた。そして、美沙さんは。

「……はい」

私の理想からすると、20点ぐらいのプロポーズだった。だが何となく、気付いてはいた。将棋のプロというのは一般的な常識から離れたところにおいて、そんなところで幸せを模索している人なのだ。

その後、なぜか何事もなかったかのように研究会は続いた。私は美沙さんと将棋を指していた。そして一時間もたったころ、池永さんは言った。

「あの……コーヒーを一杯」



「よしっ」

思わず叫んでしまった。アゴヒゲ山本が、自慢のあごひげを引っ張りながら苦笑している。苦節三週間、ようやく将棋で勝つことができたのだ。二枚落ちだけど。

「いやあ、笹子ちゃん強くなったね」

ロレックス進藤に褒められる。悪い気はしない。伊達眼鏡斉藤も満足そうに小さく頷きながらモスコミュールを飲んでいる。

「しかしお前が将棋にはまるとはなあ」

父はいまだに信じられないらしく「まさか」を繰り返す。確かに子供の頃からそういうものには全く触れてこなかったし、自分でも驚いているのだ。

「まあ、目標は優勝だし！」

「え」

「えっ」

「はあ？」

三人の声と、伊達眼鏡の視線が私の方に集中した。言葉が足りなかった。

「E級のね」

「びっくりしたあ。それなら頑張ればなんとかなるよ」

そう、何とかなる。今の私の目標は、実はもう一つある。

おいしいコーヒーを淹れること。

あの日以来池永さんは再び毎日来るようになり、相変わらずコーヒーばかり頼む。もう、無理に紅茶を飲んでもらうのはあれきりでいいと思った。よりいいコーヒーを提供するのが、婚約へのお祝い。

「よし、今度は飛車落ちでやってみようか」

「え、それはちょっときつい……」

「大丈夫、おじさん酔ってるから」

すでにアゴヒゲ山本は駒を並べ始めている。将棋好きは負けず嫌いでもあるらしい。その点は私に向いていると言える。

「じゃあ、お願いします」

私は、決戦に備えてカップのコーヒーに口を付けた。今のところ、相変わらずまずいコーヒーを、心地よく飲み干した。